

窓を開ければ

スロボデニユク・マリイア

日本語・日本文化研修留学生 ウクライナ

朝日がキーウの建物の窓に反射して輝いている。朝食を準備し、仕事へ向かう人々の周りでは、渋滞した公共交通機関の騒音が響いている。バス停では、人々が時計を見ながら、また遅刻して上司に叱られるのではないかと気にしている。学生たちも大学へ急ぐ。授業前にノートを見返す人もいれば、移動中に課題を仕上げる人もいる。また、バスに乗り遅れないよう急いでいる人もいる。そのような慌ただしい環境の中で、私も育った。大都市での生活は、私の生活リズムに大きな影響を与えた。いつも時間に追われ、締め切りを気にしながら過ごしていた。

しかし、そんな忙しい毎日の中で、私が何より楽しみにしていたのは週末だった。

それはただ家や学生寮で過ごすただの週末ではない。小さなリュックを背負い、電車に乗って祖母の住む村へ向かう週末である。電車が街を離れるにつれて、窓の外の景色は少しずつ変わっていく。高い建物は畑や森へと姿を変え、街の騒がしさも遠ざかっていく。祖母の村には、都会とはまったく違う空気が流れていた。そこでは急ぐ必要がなく、時間がゆっくりと流れているように感じられた。朝は鳥のさえずりで始まり、夜は木々の葉が揺れる音と満天の星空に包まれる。そんな時間は、私にとって心を休める大切なひとときだった。しかし週末は必ず終わる。再び電車に乗ってキーウへ戻ると、締め切りや勉強、そして都会の慌ただしい日常が私を待っていた。まるで見えない力が、私を静かな世界から引き戻しているようだった。

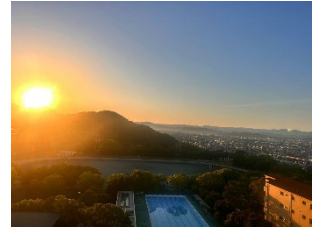
そんな生活が、私の大学時代の日常だった。

ある日、先生が学生たちに文部科学省国費外国人留学生制度について紹介してくださった。日本へ留学できる制度だと聞き、私は興味本位で詳しく調べてみることにした。大学の一覧を見ているとき、ふと私の目に留まったのが和歌山だった。写真には海や山、そして豊かな緑が写っていた。その風景を見た瞬間、祖母の村で感じるあの穏やかな気持ちを思い出した。

さらに、私の心を引いたのは海だった。日本人や多くのウクライナ人にとっては見慣れた景色かもしれない。しかし、私はそれまで一度も自分の目で海を見たことがなかった。だからこそ、山と海が共にある町で学ぶということに特別な魅力を感じたのである。そして、そんな町で学ぶ自分を思い描くようになった。

それからしばらくして、私の夢は現実になった。長い旅を経て、私はついに和歌山へやって来た。新しい国での生活や勉強、家族と離れて暮らすことへの不安はもちろんあった。しかし、到着して間もなく、写真で見ていた風景が本当に目の前に広がっていることに気付いた。海は想像していた通り美しかった。山々はすぐ近くに見え、町の至るところに緑があふれていた。その景色は、どこか祖母の村で過ごした時間を思い出させた。また、大学のキャンパスにも驚かされた。キャンパス内にはたくさんの木々や草花があり、建物は

豊かな緑に囲まれている。授業の合間には木陰のベンチに座り、少し休憩しながら次の授業に向けて気持ちを整えることができる。今、この作文を書いている瞬間も、開けた窓の向こうから鳥のさえずりが聞こえてくる。特に朝、山の向こうから太陽が昇る頃の鳥の声はとても美しい。



和歌山での生活が始まってから、私は少しずつ気付くようになった。私がこの町で最も好きなのは、有名な観光地や特別な場所ではないということに。私にとって何より大切なのは、ここで感じられる穏やかな空気だった。そして、私にとって特別な場所の一つが海辺である。授業が終わった後、ときどき本やノートパソコンを持って海へ出かけることがある。波の音を聞いていると自然と心が落ち着き、海に沈む夕日を眺めていると、言葉では表せないような気持ちになる。

日本へ来る前の私は、「休む時間」というものは特別に作るものだと思っていた。大都市では、週末や長期休暇を待たなければ、本当の意味でゆっくりすることはできなかったからだ。しかし、和歌山での生活は私に別のことを教えてくれた。日常の中にも、心を休める時間は存在するということだ。自然の中でほんの数分過ごすだけでも、気持ちが軽くなり、新しい力が湧いてくる。もちろん、和歌山に来たからといって生活が楽になったわけではない。留学生活には勉強や課題、さまざまな責任が伴う。むしろ以前より忙しくなった部分もある。

それでも私は、この町で自分のための時間を見つけられるようになった。窓の外から聞こえる鳥の声、波の音、緑の中を歩く短い散歩。そのような何気ない瞬間が、私に立ち止まることの大切さを教えてくれる。和歌山に来てから、私はこの町の本当の魅力は見て楽しめる自然の美しさだけではないことに気付いた。海や山、豊かな自然が作り出す穏やかな雰囲気こそが、この町の魅力なのだと思う。

また、日本の大都市を訪れるたびに、自分の選択は間違っていなかったと感じる。例えば東京を訪れた後、和歌山へ戻ってきたときには不思議な安心感があった。そのとき私は、この町の静けさや自然、そして調和のある暮らしをどれほど大切に思っているのかを改めて実感した。

ウクライナでは、車の音ではなく鳥のさえずりを聞くためには、祖母の村まで電車で行かなければならなかった。今は、ただ窓を開けるだけでいい。海と山、そして豊かな緑に囲まれた和歌山の景色を眺めるたびに、かつて写真の中にしか存在しなかったこの場所が、今では私の日常の一部になっていることに気付く。だから私にとって和歌山は、単なる留学先ではない。心から安らげる、大切な場所なのである。

Варто лише відчинити вікно

Слободенюк Марія

Стипендіатка програми МЕХТ «Японська мова та японська культура», Україна

Виростаючи у Києві, я звикла до швидкого ритму великого міста. Щоденні поїздки громадським транспортом, навчання, дедлайни та постійний поспіх стали звичною частиною мого життя. Проте найбільше я любила вихідні, коли могла поїхати до бабусиного села. Щойно електричка залишала місто позаду, шум вулиць змінювався співом птахів, а високі будинки поступалися місцем лісам і полям. Саме там я знаходила спокій, якого часто бракувало в міському житті.

Під час навчання в університеті я дізналася про програму МЕХТ, яка дає можливість навчатися в Японії. Переглядаючи інформацію про університети, я звернула увагу на Вакаяму. Фотографії моря, гір та зеленої природи одразу нагадали мені атмосферу бабусиного села. Особливо мене вразило море, адже до поїздки в Японію я ніколи не бачила його на власні очі. Саме тому ідея навчатися в місті, де море зустрічається з горами, здалася мені особливо привабливою.

Через деякий час моя мрія здійснилася, і я приїхала до Вакаями як студентка за програмою МЕХТ. Звичайно, мене хвилювали нова країна, навчання та життя далеко від дому. Однак майже одразу я зрозуміла, що реальність виявилася навіть кращою, ніж фотографії. Море, гори та велика кількість зелені стали частиною мого повсякденного життя.

Згодом я усвідомила, що найбільше ціную у Вакаямі не окремі пам'ятки чи туристичні місця, а атмосферу спокою. Територія університету оточена деревами та кущами, тому навіть між заняттями можна відчувати близькість до природи. З вікна моєї кімнати чути спів птахів, а після навчання я часто приходжу до моря з книжкою або ноутбуком. Шум хвиль допомагає зосередитися та відпочити після насиченого дня.

Життя у Вакаямі не стало менш зайнятим, ніж у Києві. Навчання за кордоном вимагає багато сил та відповідальності. Проте саме тут я навчилася знаходити час для себе навіть у звичайному повсякденному житті. Спів птахів, прогулянки серед зелені та краєвиди моря нагадують мені про важливість зупинятися хоча б на мить і цінувати теперішній момент.

Колись для того, щоб почути спів птахів замість шуму машин, мені потрібно було їхати до бабусиного села. Сьогодні достатньо лише відчинити вікно. Саме тому Вакаяма стала для мене не лише місцем навчання, а й місцем, де я відчуваю гармонію, спокій і душевний затишок.